

刻印されるかのような熱さに、腰を何度も突き出す。

淫楽に染まりきった孔に注がれる、オークのものより熱い精。その量と熱^{ねつ}におののいた内壁が、苦しいはずの孔内をくりかえし締め上げ、触手たちにからみつく。

「アあ…ッ！！♡♡♡」

驚きに引き絞られた体内に驚いたのか、尿道の触手がずりゅッ！♡と抜け去る。狭道をひと息に擦り上げられる快感に今度こそ意識が飛び、大量の白蜜を噴き上げた。

「あああああッ！♡♡♡♡……ひい…♡ん……っ♡♡ああ…っ、ン…っ♡♡」

噴水のように白蜜を散らしながら、ずりゅ♡、ずりゅう…♡、と後孔からも触手が抜け去っていく。

(やっと——終わった……？)

久々の射精に身をぐったりさせた少年だったが、

「ひいッ！？♡♡」

触手たちが抜け出たそばから、先程挿^{はい}入りきらず肉環の外に待機していた触手たちがいっせいにめりこんできた。

「あああああ……ッ！♡♡」

擦られ、こじあけられ、敏感になりきった場所を、また触手たちに犯される。

「やだ…っ！もういった……っ！もういったの…お…っ！アああッ♡♡」

目も耳も、脳すらもない触手に、少年の言葉が通じるはずもない。

新しい触手たちは薄桃色の粘液をにじませながら、肉洞をみちゅみちゅと突き進んでくる。

触手はこの部屋全体にはびこる巨大なスライムのようなかたまりから、自在に生^はえ、その形や大きさすら自由に変形させながら突きでてくる。

こんなにも大きな触手生物全体を満足させるために、あと何度、何本、触手を受け入れればよいのだろう。

「家畜に休む暇などありませんよ」

男は下方から少年を見上げ、蛇のように残忍に^{わら}微笑う。